

アジ研流
読書案内

—研究者が薦める3冊—

とてもかなわんなあと感じた本

小島 麗逸

編集部から推薦できる本三点を挙げて欲しいという依頼を受けた。中国関係書は溢れるほどあり、選書基準を決めないかぎり選べない。そこでアジア経済研究所に中国経済研究の場が与えられて以後、今日までに問題設定や論証のやり方で筆者が圧倒された本を基準に選んでみた。小説や歴史書でもよいというので若干範囲を拡げた。

一・石川滋『中国における資本蓄積機構』（岩波書店、一九六〇年）

この本は筆者が中国研究を始めた一九六〇年に出版され、日経出版賞をえた著作である。研究とはこういう方法と順序で行うものだということを教えられた。研究は問題の設定（仮説）、それを組み立てる方法論、それに従って行う論証のための資料の収集、選択、

加工の三過程を経る。この本は一九五三〜五七年の第一次五カ年計画期を研究対象とし、その計画は重工業優先政策であった。この政策がどの程度の国民経済の成長率を実現するかを実証した研究である。当時は国民経済の体系的諸統計は存在しなかった。最も基礎となる人口数さえ一九五三年にセンサスが実施され、集計に二年かけている。ましてや国民経済計算の諸統計（例えばGDPやその構成要素）は工農生産総額以外にはなかった。

このような状況下で石川教授はフェルドマン・ドーマーの成長モデルを用い、生産財（重工業）への投資率が高いほど国民経済の成長率が高くなること、短期には民衆の消費の向上は見込まれないが中期的には向上することを明らかにした。石川教授の新しい視点は高い投資率は必ず制約が働き、生存

水準ぎりぎりまで消費を下げる可能性が発生するという制約条件をモデルの中に入れたことである。

この二点の論点をどのように統計的に実証したか。前者についてはアメリカのソ連研究から中国の投資率の評価を行い、後者についてはインドと東南アジア諸国の統計から、断片的局地的にある中国の消費水準を確認された。この国際比較と中国の断片的資料の評価の作業は極めてtime consumingな努力であったに違いない。

当時の日本の中国経済研究は共産党の決議や指示の解説に終始していた。要するに左から右へ翻訳する程度のものであった。初めてのマクロ経済理論による分析である。

二・安藤正士『現代中国年表

（一九四一〜二〇〇八）
（岩波書店、二〇一〇年）

この本は石川教授の本と同様、重厚な重みを感じさせる著作である。一九八〇年代以後中国は過去の秘匿していた膨大な資料を出版するようになった。この資料の海から諸事項を選択しなければならぬ。石川教授の先述の書の情況と全く逆となった。この取捨選択には著者の歴史観が必須である。それは以下の三つに集約できる。

第一、一九四九年以前中国の各勢力の指導者が解放と完全独立を達成するために、「世界情勢、国際関係に大きな影響をうけると同時に、また世界情勢、国際関係の中に自己に有利な条件を見出して積極的に主体的に対応するようになった」という認識に立脚し、年表の起点を一九四一年に据えた。この視点から国民党、第三勢力の動きを包摂して諸事項を選択している。

第二、中国共産党の革命の思想は基本的にナシヨナリズムで、階級闘争史観は従であるという視角である。国家の形成は領土と確定とその保全およびこれを守り抜く権力機構（軍隊）の育成にある。従って領土の確定行為やチベッ

ト、新疆などの囲い込み、香港、マカオ、台湾の回収が最優先にされる。これを実現するため諸事項が多く選択されている。他国の民族解放支持の声明などがしばしばこの国益と衝突するときは、後景に追いやられる軌跡が読み取れる。その典型例が中越関係である。

第三、国内政治については国家・党・軍の組織や制度に最も力を入れて、事項が選択されている。これは権力機構そのもので、この変遷を追うことで国家や軍の権力機構を読み取るうとする視点が見られる。この権力機構を維持発展させる基盤は言うまでもなく経済力である。中央官庁の軍事産業管理機構の変遷事項を追うだけで経済計画の優先順位が軍事産業の育成にあったことが判明する。四〇〇〇万人余と言われる餓死者を出しながら、また「一〇〇年の動乱」といわれる文化大革命中も毎年核実験を継続したり、宇宙開発で最初打ち上げられた人工衛星は他国の衛星を打ち落とすものであったり、さらに最近の資源輸入ルートを確認する海軍力の強化の事項を取り出してみると、その権力の性格を十分に利用者に知らせてくれる。

図書館学から言えば、年表は工具の部類に分類される。一般辞書

は不明な語句を確認するためのものである。しかし白川静教授の三大辞典(『字通』、『字訓』、『字統』平凡社)は熟読すべき辞典である。同様に、この安藤教授の年表は味読すべき年表であり、研究者であれば座右の書として机の上に置きたい著作である。

三、司馬遼太郎『菜の花の沖』

(文藝春秋社、全六巻、二〇〇〇年)、ジョゼフ・ニーダム著、東畑精一・藪内清監修『中国の科学と文明』(思索社、一九七九年)全二巻のうち、第一〇巻『土木工学』、塩野七生『ローマ人の物語』(新潮社)、第一五巻のうち、第一〇巻『すべての道はローマに通ず』

この三冊は商品経済の拡大、それを支える水運、道路、情報網などのインフラが新しい国家の形成や文明の形成の基礎を与えたことを知らせてくれた。中国は一九七〇年代末まで対外的には鎖国政策をとり、国内では各行政区相互間の人と財の移動をほぼ禁止していた。それを一九八〇年から改革開放政策を採用し、大転換した。こ

の大転換を可能にした要因のひとつに国内の行政区相互間で「違法」な人と物の移動が進行していたのではないかという仮説をたてていたとき、司馬の著書を読む機会に恵まれた。中国の一九七〇年代末までの鎖国状態は日本で言えば徳川幕府の鎖国と三〇〇余の各藩間の移動の禁止政策に相当する。この小説は高田屋嘉兵衛を主人公に、大阪京都経済圏の物品を北海道の物産(ニシンやコンブ)とを北廻船で運んだ物語である。江戸経済史の本と言ってよい。嘉兵衛は千島航路をも開拓するが、そこで帝政ロシアの軍隊と遭遇し、幕府中枢は大いに動揺する。鎖国が北から風穴をあけることになる。歴史の転換にこの水運の拡大が関与した。あとの二著作は道路網が古代文明の形成を支えたことを知らしめる本である。秦から後漢までのほぼ四〇〇年の古代文明は長安を起点として東西南北に伸びる軍用道路により、統一と帝国の形成がなされた。塩野氏が描くローマを起点とする地中海の沿岸部を一週し、イングランド、中東欧に至る大道路網こそ、ローマ帝国の基礎になったことを知らせてくれる。

昨今の中国のインフラ建設を見ていると驚嘆の一語に尽きる。高

速道路網、新幹線網、光ファイバー網、パイプライン網、内水面を含む港湾設備など、倍々ゲームで増加している。これは領土内の治安問題を解決せんとする軍事的色彩を含んで、ニーダムと塩野氏の著作は将来の中国の姿を考えるうえで大きな示唆を与えてくれる。

以上、五点には研究の視点、方法論、検証のやり方などの面で圧倒される。歴史観や視点の壮観さについては言うに及ばず、それを検証、論証していく資料の収集、選択、加工の忍耐強さとあくなき努力に敬服するしかない。「こりゃかなわん」というのが実感である。司馬氏の『坂の上の雲』に姓と名、さらに生年月日、死亡時まで付されて登場する人は一〇〇〇人を超える。おそらくその倍以上の人を調べているに違いない。塩野氏はあながきで、ローマ帝国についての研究は浜の真砂のように多い。しかし「たった一度の人生を、他人の業績を拾い歩く作業に費やす気持ちにはならない」と結んでおられるが、己の歴史観を描写し尽くしたうえの実感であろう。読後にあるのはやはり「かなわんなあ」という嘆息である。

(こじま れいいつ／大東文化大学名誉教授「中国経済論」)